

今では知る人ぞ知るくらいになった感もある、下関の栄光の鉄道史。  
けれどこの人に語らせれば、それが昨日のこゝのように蘇る。  
かねて日本近代史をテーマとして珠玉の作品を物し、  
鉄道旅行に昭和時代への郷愁を重ねてやまない作家、関川夏央さんだ。  
あくまで新幹線で現地へ乗りつけ、船をはさんで、ローカル線に乗車。  
さらに各地を踏査して、図らずも最後は南氷洋のロック（！）で締めた。  
鉄道愛に満ちたレポートは、下関が「鉄、の都」であることを教えてくれる。



関川夏央（せきかわ・なつお）  
1949年、新潟県生まれ。作家。上智大学外国語学部中退。  
実質的デビュー作『ソウルの練習問題』には関釜フエリー乗  
船のため、下関港埠頭に立つ場面が描かれている。『海峡を越  
えたホームラン』（1985 講談社ノンフィクション賞）、『坊  
っちゃん』の時代（2002 手塚治虫文化賞）、『昭和が明る  
かった頃』（1998 講談社エッセイ賞）、『おじさんはなぜ時  
代小説が好きか』、『家族の昭和』など著書多数。2001年  
には『二葉亭四迷の明治四十一年』などで明治期以来の日本  
人の思想や経験を掘り下げた業績に対して、司馬遼太郎賞を  
受賞。2006年刊『汽車旅放浪記』（新潮社）で鉄道好きを  
吐露して以来、各紙誌に鉄道関係の文章を発表することも増  
えている。神戸女学院大学客員教授。

鉄の作家が乗って、歩いて、体感した栄光の鉄道史

# 下関、駅と鉄道の物語

文 関川夏央

撮影 橘野栄二



自ら「終着駅好き」と名乗る関川夏央さん。かつて三角屋根が目の前にあったJR下関駅前人工地盤の上から海側を見つめて、この都市の歴史の厚みに想像をめぐらせた。